

『詩經』を讀む爲に (一)

—周南・關雎篇「窈窕」の意味について—

福 本 郁 子

(一)
中國古代に於いては儒家の教典として五經が重んじられた。これは漢の武帝が五經博士を置き、儒教を國學としたことに端を發する。五經とは、例えば『初學記』では『詩』『書』『易』『春秋』『禮』を指すとするのがそれである。ここで言う『禮』とは、漢代以後は『儀禮』を指し、後世、『禮記』を指すようになる。

五經の文の解釋は極めて難しい。それぞれの文獻の成立が數千年を遡る古語から成るものだからである。その中でも紀元前四世紀中頃には成立したとされる『詩經』の解釋は最も難解である。その理由の一つは、今述べた如くそれが二千年以上前の古代中國語で書かれていることにあるのであるが、もう一つの理由は、我々現代人が『詩經』の詩を誦った人々の生活・宗教・習俗・社會を知らないことにある。つまり我々が當時の人々にとっての日常的な常識や、神聖な場に於ける常識を知らないということである。例えば、清朝考證學者の『詩經』解釋を見ても、詩の中で使用された文字や言語については詳らかな考證がなされているのであるが、『詩經』諸篇の内容や意味については理解が不足していると言わざるを得ない。それは詩を文獻の用例を根據とすることでのみ理解しようとし、當時を生きた人々の常識を知ることには目を向けなかった爲であると考えられる。故に結果的に詩の内容や意味にまで理解が及ばなかったのである。

それでは『詩經』の詩を誦った古代中國人にとっての常識、即ち彼等の生活・宗教・習俗・社會を知り、『詩經』解釋に資するにはどうしたらよいのであろうか。それには清朝考證學の知識を基にしつつ、甲骨文・金文の知識を廣く應

用し、グラネー^(三)・エリアーデ^(四)・柳田國男^(五)・折口信夫^(六)に始まる基本的な民俗學・宗教學的知識や、社會學・歴史學的知識を補助學として用いることに盡きるであらう。

『詩經』の詩を解釋するために目を通さねばならない注釋書は夥しい數に及ぶ。例えば、明代の『通志堂經解』や清代の『皇清經解』『續皇清經解』には、膨大な『詩經』解釋書が収録されており、我が國に於いても、室町時代から現在に至るまで無数の注釋書が世に出ている。先に清朝考證學の知識の必要性について觸れたが、その範疇に含まれる注釋書もまた實に多い。しかも清朝考證學の説を使用する場合、それを單體で讀むだけでは足りず、毛傳・鄭箋等の傳統的解釋と、それらの解釋が踏襲されていた經緯を理解した上で、清朝考證學の諸注釋書が有する學術的意義を知らねばならないことは言うまでもない。無論、それらの膨大な注釋書の總てを讀むことは不可能であるので、先ずは最低限、目を通さねばならないものを、漢代から現代に至るまでざっと概觀してみよう。

中國では、漢代の毛亨が作ったとされる毛傳に始まり、次いで鄭玄の鄭箋、そして唐代の孔穎達の『毛詩正義』^(七)が、後世、傳統的正統派の注釋として長く尊ばれてきたという經緯がある。先の『通志堂經解』『皇清經解』『續皇清經解』に収録されている注釋書は、その總てではないにせよ、相當數がこの傳統的解釋を踏襲したものである。その傾向は宋代になると大きく變化する。即ち毛傳・鄭箋・正義の説を疑い、獨自の説を説くようになるのである。その代表的なものが鷗陽脩『詩本義』^(八)や、朱熹『詩集傳』^(九)であった。清代になると訓詁を主と

し、「實事求是」を目標として掲げ、『詩經』の文字・言語の原義を探究することに主眼が注がれた。陳奐『詩毛氏傳疏』、馬瑞辰『毛詩傳箋通釋』、王先謙『詩三家義集疏』等がその代表的なものである。他に王念孫・王引之父子や陳啓源・戴震等による文字・言語に關する詳細な研究がある。近現代に至っては林義光『詩經通解』・聞一多『詩經通義』等・屈萬里『詩經詮釋』・袁梅『詩經譯注』・程俊英等『詩經注析』等、枚舉に暇が無い。しかし、それぞれの立場によつて独自の説を展開させてはいるものの、これらの注釋書に多く通底するものは、やはり毛傳・鄭箋・正義、及び集傳の解釋であつた。そしてその傾向は、我が國に於ける數多くの注釋書にも等しく見られるものである。

ここで改めて、戦後の『詩經』解釋に於いて極めて重大な影響を與へた、フランスのマルセル・グラネー『中國古代の祭禮と歌謠』について觸れておかねばならない。この著書は、『詩經』の詩とアジア西南諸族で行われていた歌垣とを比較し、社會學の立場から詩を解釋したものである。即ち『詩經』の詩を「古代歌謠」と規定し、祭禮・舞踏・合唱・競争・饗宴の場やそこでの行爲等を個々の詩にあてはめて解釋するものである。例えば周南・關雎篇については、河岸の邂逅、——草摘み競争、——憂懼、——別居と娘の隱棲、——不眠、——和合音樂との主題。——詩句の復唱と、この詩篇にほとんど無言劇のごとき觀を與へる連絡とに注意せよ。

と、先ず解釋の基本となる主題を規定し、これに従つて詩を解釋するのである。我が國に於いては目加田誠・境武男・松本雅明等がグラネーの影響を強く受けている。ことに松本は「私はグラネー氏に負ふところがきはめて大である」として、その研究を批判的に繼承している。一方、筆者を含め、赤塚忠・白川靜・家井眞等はそれぞれ清朝考證學の知識を基としながら、宗教學・民俗學・民俗學・社會學等を補助學として、それぞれが新しい『詩經』の解釋を行っている。

中國では聞一多が主として金文・民族學・民俗學を補助學として、『詩經』に畫期的な解釋を施している。残念ながらこれ以後、中國では聞一多に並ぶ者は出ていない。

繰り返しになるが、『詩經』の詩を解釋するためには、清朝考證學による文字・言語の緻密な考證を基にして、甲骨文・金文の専門的な知識と、宗教學・民族

學・民俗學・社會學等を補助學とする研究態度が必須である。そしてそれ等を基に『詩經』を讀んだ時代の人々にとつての日常、或いは非日常に於ける常識を知り、想像することができて初めて『詩經』に収録された一篇の詩の解釋が可能となるのである。そして一篇一篇の詩の解釋を積み重ねながら、『詩經』という一冊の書全體を分析し、新しい解釋を體系的に構築することが、『詩經』の原義を研究する者のあるべき姿であると思う。傳統にとらわれず、『詩經』を新たに學ぶ者は、先ずその當時にあつたであろう社會を想定、または規定し、新たに『詩經』の持つ世界觀を再構築しなければならない。従つて、現在の『詩經』解釋とは、言わば大きな假説なのである。

以上を踏まえて、次章からは『詩經』に於ける難解の語の意味を確定することで、その理解に便ならしめようと思う。

(二)

本論に於いて着目するのは、周南・關雎篇の「窈窕」の語である。以下にその全文を擧げる。

周南・關雎篇

- 第一章 關關雎鳩、在河之洲。窈窕淑女、君子好逑。
- 第二章 參差荇菜、左右流之。窈窕淑女、寤寐求之。
- 第三章 求之不得、寤寐思服。悠哉悠哉、輾轉反側。
- 第四章 參差荇菜、左右采之。窈窕淑女、琴瑟友之。
- 第五章 參差荇菜、左右芣之。窈窕淑女、鍾鼓樂之。

- (押韻) 第一章 ○ || 幽部韻。 第二章 ○ || 幽部韻。 第三章 ● || 職部韻。 第四章 ◎ || 之部韻。 第五章 △ || 宵部韻、▲ || 藥部韻：宵樂通韻)

「窈窕」は、第一章に「窈窕淑女、君子好逑」、第二章に「窈窕淑女、寤寐求之」、第四章に「窈窕淑女、琴瑟友之」、第五章に「窈窕淑女、鍾鼓樂之」と見える。詩句の構造上、この「窈窕」の語が下の「淑女」を形容する語であることは、

語順から見て明らかである。

ではこの「窈窕」の語を毛傳・鄭箋・集傳はどのように解釋しているであろうか。「窈窕」の語が修飾する対象の「淑女」の解釋と併せて見てゆくこととする。

毛傳は、

窈窕、幽閒也。淑、善。……言后妃有關雎之德、是幽閒貞專之善女、宜爲君子之好匹。

と、「幽閒」の意と解している。この「幽閒」がどのような意味であるかについては直接的な説明がないが、後文に「幽閒貞專之善女」と、「貞專（節操があり一途であること）」の語を添えて解釋していることから推すに、善女（淑女）の徳を形容する語ととらえているようである。即ち日本語では「奥ゆかしく物静か」ほどの意味であろうか。

鄭箋は毛傳説に異を唱えることをせず、

言后妃之徳和諧、則幽閒處深宮貞專之善女、能爲君子和好衆妾之怨者。言皆化后妃之徳、不嫉妬。謂三夫人以下。

と解する。「幽閒處深宮（幽閒として深宮に處り）」と言っていることから、「幽閒」を奥深い宮室にいる貞專の善女の様子を形容する語ととらえているようである。日本語では、先の毛傳に同じく「奥ゆかしく物静か」ほどの意味となる。

因みに『毛詩正義』はこの鄭箋説を誤って解釋している。

正義曰、窈窕者、謂淑女所居之宮形狀窈窕然。故箋言幽閒深宮是也。傳知然者、以其淑女已爲善稱、則窈窕宜爲居處。故云幽閒、言其幽深而閒靜也。

孔穎達は、「窈窕」とは、淑女がいる宮室の状態が「窈窕然」としてのことであると云う。つまり室内がうす暗く静かな様子を形容する語であると解しているものであり、更に鄭箋の解釋がこれに當たるとしているのである。しかしこの説に對して、馬瑞辰は、

説文、窈、深遠也。釋言又曰、窈、肆也。據説文、窈、深肆極也。極深爲肆、是窈・窕皆有深義。……或以狀宮室之深邃、班固西都賦、又杳窈而不見陽、是也。至此詩窈窕、則不取深義。

と、『説文』と『釋文』を補強資料として、「窈窕」には深いという意味もある

ことを指摘してはいるものの、關雎篇の「窈窕」はこの意味で解すべきではないと説く。更に、

箋云、幽閒處深宮貞專之善女、亦謂幽閒貞專之善女處於深宮耳、未遂訓窈窕爲深宮也。孔疏謂窈窕爲淑女所居之宮形狀窈窕然、殊誤。

と、鄭箋が言う「幽閒處深宮貞專之善女（幽閒として深宮に處る貞專の善女）」とは、「幽閒貞專之善女處於深宮（幽閒貞專の善女、深宮に處り）」という意味に過ぎず、鄭玄は「窈窕」を「深宮」と見なしているわけではないこと、また孔穎達が「窈窕爲淑女所居之宮形狀窈窕然（窈窕は、淑女がいる宮室の状態が窈窕然としていることである）」と解するのは、甚だしい誤解であることを指摘している。馬瑞辰の指摘は至極妥當であり、孔穎達は鄭箋の「幽閒處深宮（幽閒として深宮に處り）」を「幽閒深宮（幽閒たる深宮）」と誤解したものと考えられる。

集傳も鄭箋同様、毛傳説を踏襲し、

窈窕、幽閒之意。淑、善也。……周之文王生有聖徳。又得聖女妣氏、以爲之配。宮中之人、於其始至、見其有幽閒貞靜之徳。故作是詩。

と解する。これは毛序の「關雎、后妃之徳也。……是以關雎樂得淑女以配君子、憂在進賢、不淫其色。哀窈窕、思賢才、而無傷善之心焉、是關雎之義也」に基づき、毛傳の「幽閒」を、文王の后妃妣氏（太妃）の徳を形容する語と解し、「幽閒貞靜（奥ゆかしく物静か）」の意であるとみなすものである。毛序や毛傳説に異を唱えず、無批判にこれを正しいものとしてとらえているため、「窈窕」という字義の證明ではなく、太妃たる「淑女」の語に寄せた説明に終始している。

如上の解釋をまとめると、毛傳は「窈窕淑女」を「奥ゆかしく物静かな淑女」と解し、鄭箋・集傳はこれを無批判に踏襲していることになる。

(三)

それでは清朝考證學者や近現代の研究者は、「窈窕」をどのように解釋しているであろうか。代表的な解釋をいくつか挙げて見てみよう。

一つ目の解釋として、毛傳説をとるものを挙げる。先ずは馬瑞辰説を引く。

窈窕淑女、傳、窈窕、幽閒也。瑞辰按、廣雅、窈窕、好也。窈窕二字疊韻。方言、窈、美也。陳楚周南之間曰窈。秦晉之間、凡美色或謂之好、或謂之窈。又曰、秦晉之間、美心爲窈、美狀爲窈。蓋對言則異、散言則通爾。說文、窈、深遠也。幽・深義近、幽與窈亦雙聲也。窈與姚通、姚冶一作窈冶。說文、姚、美好也。方言、窈、好也。窈又訓閒。爾雅、窈、閒也。方言、窈、言閒都也。閒都亦好也。又窈與嬈聲近。廣雅釋詁、嬈、好也。釋訓又曰、嬈嬈、好也。合言之則曰窈窕。傳云幽閒者、蓋謂其儀容之好、幽閒窈窕然。文選李善注引薛君韓詩章句云、窈窕、貞專貌。楚辭王逸注云、窈窕、好貌。廣雅釋詁、窈窕、好也。義皆與毛傳同。

馬瑞辰は「窈窕」の二字は疊韻の語であるので、單言すれば「窈」であり「窈」であるとしている。即ち「窈」と「窈」は同義で、また「窈窕」とも同義であると言っているのである。更に『廣雅』釋詁に「窈窕、好也(『窈窕』は、好い意である)」とあるを引き、また、『方言』に「窈、美也(『窈』は、美しい意である)」とあるを引いて、「窈窕」は「好い」「美好」の意であると解する。簡潔に言えば、馬瑞辰は「窈窕」が疊韻の語であり、「窈」または「窈」を連言した語であること、そしてこれらが「美好」の意であると解しているのである。更に毛傳の「幽閒」については以下のように述べる。①「窈」は深遠の意、「幽」は深の意であるので、この二字は意味が近く、また雙聲である。②「窈」は「姚」「嬈」に通じ、ともに好・美好の意である。「窈」はまた「閒」にも通じ、「閒」にもまた好の意がある。この①及び②によって、「幽閒」が「窈窕」と同義であることを婉曲に示し、更に後文に於いては、毛傳の「幽閒」は「儀容之好(『貞專貌(『節操があり一途である様)』を引く。「窈窕」が疊韻の語で、「好い」「美好」の意であることについてはある程度の根拠が示されているが、「窈窕」が「幽閒」であることについては、論證が弱い。つまり馬瑞辰も、毛傳説の是非については言及せず、無批判にこれを正しいものととらえていることがわかる。

同様に、陳奐も毛傳説に對して異を唱えることをしない。

傳詁窈窕爲幽閒。爾雅、冥、窈也。幽、深也。窈、肆也。窈、閒也。窈、言婦德幽靜也。窈、言婦容閒雅也。……揚雄方言云、美心爲窈、美狀爲窈。

釋文引王肅述毛云、善心曰窈、善容曰窈。張揖廣雅、窈窕、好也。又窈窕、深也。蕭統文選顏延年秋胡詩、李善注引韓詩章句、窈窕、貞專貌。析言渾言、義竝相通。淑、善、釋詁文。君子偕老、韓奕同。說文、俶、善也。聘禮、俶獻。古文俶作淑。古淑俶聲通。

陳奐は「窈窕」を「析言」、即ち一字ずつで使用する場合と、「渾言」、即ち二字まとめて熟語として使用する場合とに分けて説明する。先ず、「析言」の場合の「窈」と「窈」それぞれの意味であるが、『爾雅』に「冥、窈也(『冥』は窈の意味である)」、「幽、深也(『幽』は深の意味である)」、「窈、肆也(『窈』は肆の意味である)」、「窈、閒也(『窈』は閒の意味である)」とあることを根拠に、「窈」「幽」は同義で、「窈」「閒」も同義であると解する。更に「窈」は「婦德幽靜(『婦人の徳が奥ゆかしく物靜か)』の意であるとして、『方言』の「美心爲窈(『内面的な美しさを窈となす)』と、『釋文』所引王肅注の「善心曰窈(『美しき心を窈と言ふ)』を證左として擧げる。「渾言」の場合の「窈窕」の意味については、『廣雅』及び『文選』所收顏延年「秋胡詩」李善注所引「韓詩章句」を根拠として、好(『みめよき様)と貞專(『節操があり一途である様)の兩義があるとする。従って「窈」「窈」それぞれのもつ意味は、熟語の「窈窕」の場合でも同じであると解釋しているのである。

毛傳説に従う傾向は近現代に入ってもさほど変わらない。陳子展は、

窈窕、幽閒也。淑、善。と、毛傳説をそのまま踏襲し、「幽閒」が如何なる意味であるかについては言及しない。屈萬里は、

窈窕、音杳挑。容貌美好也。義見廣雅及方言。窈窕、毛傳解作幽閒、朱傳從之。淑、善也。此指品德言。

と、容貌が美麗な意味であると解し、その根拠として『廣雅』と『方言』の書を擧げるのみであるが、これが馬瑞辰や陳奐等先人が論證に使用した文献の一部を借用していることは明らかである。高亨もこれと殆ど同じ解釋で、窈窕、容貌美好貌。淑、品德善良。

と述べる。程俊英も同様に、

窈窕、美好貌、疊韻詞。……毛傳、淑、善。^(三六)

と、美麗な様を形容する語であると解釋している。屈萬里・高亨・程俊英が、皆馬瑞辰や陳奥の名こそ明記していないが、すべて彼等の説に據っていることは明らかであろう。しかし如上の説では、毛傳説の「幽閒」が、何故「美好」の意味になるのかについての根拠が示されておらず、理解し難い。

以上が毛傳説を踏襲して、「窈窕」を「幽閒」とみなし、みめよい様・美しい様と解釋するものである。

二つ目の解釋としては、先の馬瑞辰が指摘する如く、「窈窕」に二義があることにより、複数の説を併記して結論を出さないものである。例えば林義光は、

窈窕、廣雅云、好也。又云、深也。^(三五)

と言い、「好」の意、「深」の意の二説を併記し、結論を出さない。袁梅は、

窈窕、嫺雅美好的様子。詩集傳、窈窕、幽閑也。後世形容美女美男、皆曰窈窕。古樂府孔雀東南飛、雲有第三郎、窈窕世無雙。又可形容山水宮室幽邃深遠。杜甫詩、煙生窈窕谿。曹攄詩、窈窕山道探。喬知之詩、窈窕九重

闈。杜牧詩、柳村穿窈窕。淑女、文靜美兩的姑娘。淑、善。美好。^(四〇)

と、先ず集傳説「窈窕、幽閑（＝閒）也」を論據として、「窈窕」を「嫺雅（＝優雅）」で「美好（＝みめよい）」様を形容する語であるとするが、「窈窕」が「幽閑（＝閒）」であることの證明はない。更に鄭箋説を論據として、「又可形容山水宮室幽邃深遠（＝また山水や宮室が奥深い様を形容する）」と言い、用例として杜甫・曹攄・喬知之・杜牧の詩を引用する。毛傳説に比重を置いているようにも讀めるが、いずれの説が正しいのかを明言していない。

三つ目の解釋は、如上の傳統的解釋にはあまりとらわれず、独自の解釋を試みるものである。例えば、吳菱雲は、

關雎、窈窕淑女、傳箋竝以幽閒貞專訓窈窕。正義云、窈窕者、淑女所居之宮形狀窈窕然。蓋以字皆从穴、望文生義耳。菱雲謂窈窕當與媯嬈通。窈窕婦容也。淑、婦德也。說文、媯一曰嬈也。嬈、直好兒。^(四一)

と論じ、「毛詩正義」が「窈窕」を「淑女所居之宮形狀窈窕然」と解している

のは、「蓋以字皆从穴、望文生義耳（＝窈窕の二字が皆穴を部首としていることによるものと推測され、これはいわゆる望文生義である）」と、批判を加えている。更に自身の解釋としては、「淑女」の「淑」が婦人の徳を言う語であるに對し、「窈窕」は婦人の容姿を言う語で、「媯嬈」の意であるとする。そして「說文」を根據として、「媯」は「嬈」と同義で、「直好兒」であると解する。

「直好」とは如何なる意味であるかを考えるに、改めて「說文」を見ると、媯字條には「媯、苛也。一曰、擾、戲弄也。一曰、嬈也。从女堯聲」とあり、嬈字條には「嬈、直好兒。一曰、媯也。从女翟聲」とある。その段注に「直好、直而好也」とあることから、「直好」の「直」は「ただ」「ただチニ」等と讀む副詞ではなく、下の「好」と並列の關係にあり、これと同じく形容詞として讀むべきであろう。「直」は、例えば俞樾が『禮記』少儀篇「性之直者則有之矣」の「直」を「直訓長、凡物曲則必短、直則必長。故直有長義^(四二)」と解していることから、「長」の意に解し得る。また朱駿聲も「直好兒。从女翟聲。聲韻、細腰兒^(四三)」と解している。従って、『說文』の「直好」とは、「すらりと背が高くみめ麗しい様」に解し得るのである。つまり吳菱雲は「窈窕」を「すらりと背が高くみめ麗しい様」に解釋していることがわかる。

丁惟汾は、

傳云、窈窕、幽閑也。淑。善。按幽雅雙聲。幽閑爲雅閑。雅古音讀玉。古作都。方言二、美狀爲窕。郭注、言閑都也。閑閑古通用。閑都爲雅閑之倒言。窈幽疊韻。窈閑雙聲。閑讀電聲、古無舌上音也。惟汾按、窈窕、爲雙聲連辭字。爲窈窕之音轉。窈窕古同聲。衛風竹竿篇、窈窕竹竿。傳云、窈窕、長而殺也。窈窕本義爲體長而高。體長而高、又舉止幽閑。故傳訓爲幽閑。^(四四)

と論じ、毛傳が「窈窕」を「幽閑」と解していることについて、以下の如く説明する。

「幽」「閒」は雙聲であるので、「幽閒」は「雅閑」である。「雅」は古くは「都」とも通じていたこと、また『方言』に「美狀爲窕（＝美しい様を窕となす）」、郭璞注に「言閑都也（＝窕は）閑都を言う」とあること、「閑」「閒」は古くは假借關係にあったことから、「閑都」は「雅閑」の倒語であり、「閑都（都閑）」は「雅閑」であるので、毛傳の言う「幽閑」は、「雅閑」＝「閑都（都閑）」＝「窕

「美狀(美しい様)」ということになる。更に自身の解釋としては、「窈窕」は雙聲連言の語で、「窈窕」の假借字であると解するのである。「窈窕」は衛風・竹竿篇に「窈窕竹竿」と見えており、丁惟汾はこれを毛傳が「長而殺也」と解している部分を引用しているのであるが、この「殺」とは如何なる意に解すべきであるうか。竹竿篇に於いて丁惟汾が「按、殺古音讀晒。與織雙聲。鄭注、考工記輪人、^(四七)織、殺小貌。長而殺、爲長而織細」と解していること、更に陳奐も「殺者、織小之稱」と解していることから推すに、「殺」は「織細(細い様)」と見るべきであろう。また冒頭で『方言』の「美狀爲窈」を引いていることを兼ね合わせて考えると、丁惟汾は「窈窕」を「窈窕」の假借字とし、「背が高くほっそりとして美しい様」を形容する語と解釋していることがわかる。但し末文で、「體長而高、又舉止幽閒。故傳訓爲幽閒(背丈が高ければ、立ち居振る舞いが幽閒(美しい様)となる。だから毛傳は「窈窕」を「幽閒」と解釋しているのである)」と言うのは曲解であると言わざるを得ない。

吳夔雲と丁惟汾は、それぞれ論證の方法は異なるが、ほぼ同じ結論が導き出されている點については興味深い。

以上、中國に於ける「窈窕」の解釋を幾つか見てきたわけであるが、既に示してきた如く、これらは以下の三説にまとめられる。

その一は、毛傳・鄭箋・集傳説に従うもので、馬瑞辰・陳子展・屈萬里・高亨・袁梅・程俊英等がその代表的な解釋である。後世これに従う者は壓倒的に多い。

その二は、複数の説を併記して結論を出さないもので、林義光や袁梅等がその代表的なものである。

その三は、毛傳説を解説しようという意圖によるものではあるが、獨自の新しい解釋を述べるもので、吳夔雲や丁惟汾等がその代表的なものである。

(四)

ここまで中國に於いて、「窈窕」がどのように解釋されて来たかを概観してきた。では次に、我が國の研究者が中國のどのような解釋に依據してきたかに

ついて、時代に從つて見てみよう。

室町時代の注釋書『毛詩抄』に於いて清原宣賢は、

窈窕——窈窕は常にはなりのうつくしいを云が、淑女が美な心ちやほかに、かすかな奥深い處に居たと云心ぞ。心のよい方をば窈と云、貌のうつくしいを窈と云と云義あれども、是はわるいぞ。揚雄云、善心爲窈、善容爲窈者非也。女はまだよめ入をせぬ前を女と云ぞ。

と解釋する。「淑女が美な心ちやほかに、かすかな奥深い處に居たと云心ぞ」と述べるのは、既述の如く、鄭箋の「幽閒處深宮貞專之善女」を孔穎達が「謂淑女所居之宮形狀窈窕然」と誤つて解釋したものを採擇したと考えられる。更に「心のよい方をば窈と云、貌のうつくしいを窈と云義あれども、是はわるいぞ」と述べた後、先述の陳奐も引用していた『方言』の「美心爲窈、美狀爲窈」を解釋に當てることを非であるとす。

次いで江戸時代の安永七(一七七八)年、朱子學派の中村惕齋が集傳説に據つて著した『詩經示蒙句解』には、

窈窕とは、幽閑にして、物ふかく、しづかなる意。淑女は、よきむすめなり。

と見える。この「幽閑にして、物ふかく、しづかなる意」とは、淑女のいる宮室が奥深く静かな意と解しているようである。つまり清原宣賢同様、中村惕齋も鄭箋説を誤つて解釋した『正義』説に依據していることがわかる。

大正時代に入り、國譯漢文大成『國譯詩經』を著した清潭は、
窈窕は幽閒の意。俗語の「シトヤカ」又「スナホ」なり。

と、毛傳説に從つて解釋している。

次いで昭和に入ると、先述したM・グラナーの影響を強く受けた研究者の一人である目加田誠が、

(窈窕は)毛傳に幽閒。しとやか。方言に心の美しいのを窈、姿の美しいを窈といふとあるも、窈窕は實は疊韻の字、二字を以てたをやかの意を現はすものである。

と解する。目加田の『詩經』解釋は、毛傳・鄭箋等の傳統的解釋を採擇するのみに終始せず、王引之や馬瑞辰等の清朝考證學の解釋も取り入れていたと考えられ、右の引用からもそれがうかがえる。毛傳の「幽閒」の解釋に従い、これ

を「たをやかの意」と解している他に、「窈窕」を「疊韻の字」とするのは、馬瑞辰説に據るものであると考えられるが、『方言』にある「窈」「窕」一字ずつの意味を「窈窕」の解釋に當てるべきではないと述べているのは、妥當な見解である。

松本雅明もまた、M・グラナーの影響を強く受けた研究者である。松本は關雎篇の詩意を「おそらく宮廷の婚禮の奏歌として用ひられたのであらう」と述べる。「窈窕」についての説明がないので、少し長くなるが「荇菜」「流」「求」の語について述べている部分を以下に引用する。

この荇菜の興には、興のもつ二つの基本的な性格がみられる。氣分とリズムから主題に移る場合と、さらにそれに微妙な聯想が加はる場合とである。後の場合には必ず「流」「求」のやうな類字、または類句があることが注意される。さういふことを考へないで、ほしのままに道德的解釋を加へるのは、明らかに原意を誣ひるものである。したがつて、「后妃有關雎之德、乃能共荇菜、備庶物、以事宗廟」といふ毛傳、「左右助也。言、后妃將共荇菜之類、必有助而求之者。言三夫人九嬪以下、皆樂后妃之事」と解する鄭箋が誤であるのはもちろん、もつとも穩當と思はれる人々の解に、荇菜の花を左右に探し求めるごとく、世の中には女はたくさんあるが、撰んで内助せんとする徳貌兼備の人は仲々少いとあるのも、再考しなければならぬだらう。

ここで松本が、毛傳・鄭箋の道德的解釋を『詩經』の詩に當てはめることについで非常に否定的であること、また日本の他の研究者が「内助せんとする徳貌兼備の人は仲々少い」と解していることに對し「再考しなければならぬ」と指摘していることに留意したい。松本は少なくとも「窈窕淑女」を善徳と美貌を兼ね備えた女性、即ち毛傳が言う所の「幽閒貞專の善女」とは解していないことが理解されよう。しかし松本が「窈窕」を具體的にどのように解釋していたかはわからない。

高田眞治は集英社から出版された漢詩大系の中の『詩經』上下を著している。「窈窕」については、

幽閒にして貞靜なる貌（國字解）。しとやか、たおやかと訓ずる。美靜貞淑の徳を奥ゆかしく持つていて、しとやかなさま。

と解し、「淑女」については「淑は善、女は乙女、善き娘」と解しており、いずれも毛傳・鄭箋説に従つて異を唱へることをしない。

境武男は、

窈窕は婦女のものごしの印象をとらえた擬態語で、妖姚である。陳風の月出篇には天紹の語も見える。淑女は善女（爾雅・毛傳）であり、また美女（荀子賦篇揚註）。よきおとめ。

と解する。「窈窕」と「妖姚」「天紹」が假借關係にあることを指摘するも、何の論證もなしに「婦女のものごしの印象をとらえた擬態語」であるとすれば、やはり毛傳の「幽閒貞專」の意に寄せた解釋ということになる。因みに「窈窕」を「妖姚」「天紹」と假借關係にあるとするは、實はこの語の本字を考へる上で非常に重要な考え方であるのだが、このことについては後述する。

赤塚忠は、

「窈窕」を、『毛傳』には幽閒（奥ゆかしく物靜か）と解し、『集傳』もこれに據っているが、これは多分に窈窕という字面に惹かれたものである。

窈は穴の中が深くて暗い意であり、窕はずつと奥まで穴が通じている意である。そこで幽閒という意味を演繹したものと思われる。……しかし、實際は、窈窕は疊韻の連辭であつて、天（若々しい）の緩言をこの文字に寫し取つたものである。瑞々しい若さがあつて、身のこなしがしなやかなことをいうと解すべきである。淑女も善女と解するのがほとんど定説になっているが、叔女、つまり季女と同義であつて、年若い女の意に解すべきである。

と解する。先ず毛傳・集傳の「幽閒」の解釋については、「窈窕」という字面に惹かれたものである」と、漢字の部首が持つ印象にとられて誤つた解釋をしたと斷じている。先の吳夔雲が『正義』説を望文生義であると批判しているものと論點は同じである。更に「窈窕」の二字は疊韻の語で、本来「天」の一字で「若々しい」という意味を表すが、これをゆつくりと發音した音で表記すると「窈窕」の二字になるといふ。即ち「窈窕」は「瑞々しい若さがあつて身のこなしがしなやか」の意であると解しているのである。「窈窕」を疊韻字とするは、馬瑞辰説と同じであるが、「天」の緩言とするは新しい解釋である。また先に境武男が「窈窕」を「妖姚」「天紹」と假借關係にあると解していたが、

ここには「夭」字と、これと同音の「妖」字が含まれており、實は非常に示唆に富む指摘だったことがわかる。今一つ赤塚説で注目すべきは、これまで「善女」と解されてきた「淑女」を「叔女」に解していることである。「叔女」とは年若い女性を指す語で、召南・采蘋篇や曹風・侯人篇に見える「季女」と同義である。附言するならば、この「季女」とは、『詩經』に於いては「巫女」を指す語として使用されていることから、關雎篇の「淑女」もまた巫女と解すべきなのである。

赤塚が「窈窕」の本字とした「夭」を連言すると「夭夭」であるが、この語は周南・桃夭篇に「桃之夭夭」と見える。この「夭夭」について毛傳は、

夭夭、其少壯也。

と解する。「少」は、『後漢書』西南夷傳「少年間」の李賢注に「少年、未多年也」、「漢書」賈誼傳「此人少壯」の顏師古注に「少壯、猶言稍長大」とある如く、若い意である。従つて毛傳の「少壯」は、若くて盛んな様の意であることがわかる。毛傳を受けて『正義』は、

夭夭、言桃之少。

と、桃の木が若いことをいうと解する。また『釋文』にも

說文作夭、云木少盛貌。

と、「夭」は『說文』には「夭」と書かれていて、木が若くて茂盛する様子であると云う。更に陳奐は、

說文、夭、木少盛兒。引詩作夭夭。小箋云、夭夭即夭夭之假借也。豈風、

棘心夭夭。傳、夭夭、盛兒。字亦作媯媯。廣雅、媯媯、茂也。少壯與茂盛

同義。說文、媯、女子笑兒。引詩作媯媯。此三家義。^{五九}

と、『說文』が該句を「夭夭」に作っていることから、「夭夭」は「夭夭」の假借字であると解する。更に「夭夭」はまた「媯媯」の假借字でもあり、「夭夭」「夭夭」「媯媯」は、ともに若く茂盛する様を形容する語であるとする。また或説として『說文』が「媯」を「子笑兒(≡女性が笑う様)」であるととし、桃夭篇の該句を引いて「媯媯」に作るを挙げ、これを三家詩説であると述べる。即ち毛詩は「夭夭」を「若く茂盛する様を形容する語」であると解し、三家詩は「女性が笑う様を形容する語」であると解していることがわかる。

翻つて赤塚説を見るに、「窈窕」の本字とした「夭」の意味として、桃夭篇

の「夭夭」が念頭にあったことは想像に難くない。赤塚はこの「夭夭」を「夭夭」または「媯媯」の假借字と見なし、「若く茂盛する様を形容する語」であると解釋していることが推測される。ここから赤塚が、馬瑞辰・陳奐・吳夔雲等、清朝考證學の成果を踏まえ、『詩經』解釋として妥當な論證のある説を採擇していることがうかがえよう。

白川靜は、

〔窈窕は〕奥深いさまを形容する。〔楚辭、九歌、山鬼〕に「子、予が善く窈窕たるを慕ふ」とあつて、いくらかなまめかしいさまを含む語である。^{六〇}

と解釋する。「奥深いさまを形容する」と言うのは、毛傳説に従うものである。しかし該句の日本語譯には「たおやかのかのひとは」とあり、「窈窕」を「たおやか」と譯している。これは語釋の「奥深いさま」「なまめかしいさま」とは矛盾するものであり、その意圖がよくわからない。

家井眞は「窈窕」について、

窈の假借字で背が高く麗しい様。

と解し、「淑女」については、

「淑」は好の假借字で善い意。「淑女」は善女の意。^{六一}

と解する。これらはともに前出の丁惟汾説を引用した上での解釋であり、赤塚説同様、清朝考證學の成果を踏まえた妥當な見解であると思われるが、「淑女」の解釋については、定説を廢し、「季女」の用例に結び付けて解釋した赤塚説の方がすぐれていると言えよう。

(五)

以上、關雎篇の「窈窕」の解釋をめぐつて、毛傳に始まる傳統的解釋から現代の日本に於ける主な解釋を概観してきたわけであるが、ここで「以經解經」經を以て經を解す」という考證學の方法論について附言しておきたい。「以經解經」とは、經文中の或る文字・或る語を解釋する場合、同字・同語が同じ經文、または他の經文(成立年代にさほど隔たりがないことが望ましい)の中で、どのように使用されているかを檢證し、その中から最も妥當なものを採擇して、問題となつている經文の字義・語義を確定することをいうものである。例えば

先に引用した丁惟汾説に於いて、衛風・竹竿篇の「翟翟」を用いて關雎篇の「窈窕」を解釋する方法がそうである。更に筆者が竹竿篇の「翟翟」に對する丁惟汾説と陳奐説を引くことで、「窈窕」が「翟翟」の假借字であるという解釋を補完し、「背が高くほっそりとして美しい様」を形容する語であることを明確にしたのも、これと同様の方法論によるものである。また、詳しい論證はなかったが、境武男が陳風・月出篇の「夭夭」の語を用いて「窈窕」を解釋しようとしていたのもこれと同じ方法論によるものである。また、赤塚忠が「窈窕」を「夭」の緩言であると解釋したものを、更に筆者が周南・桃夭篇の「夭夭」とその毛傳説による解釋を用いて補完したのもこれと同じである。

「窈窕」について諸説を概観し、まゝ考察を加えてきた。中國に於いては、古くは毛傳によって「窈窕、幽閒也」という解釋がなされ、その後、鄭玄によって「幽閒處深宮」、朱熹によって「窈窕、幽閒之意」と、毛傳説を踏襲する解釋が繼承された。清代に入ると、馬瑞辰によって「窈窕」の二字が疊韻の語で、「窈」または「窕」を連言した語であることが指摘されるようになる。「窈窕」のような疊韻の語を一字一字に分けて解釋すべきではないことについては、既に王念孫が『讀書雜誌』卷七漢書第十六に於いて「凡連語之字、皆上下同義、不可分訓。說者望文生義、往往穿鑿而失其本指（凡そ連言の語は、すべて上下ともに同じ意味を表しており、一字ずつ分けて解釋することはできない。これらを一字一字の文字面だけで都合よく解釋すると、往々にして解釋をねじ曲げて本當の意味を誤って解釋することになる）」と指摘している。馬瑞辰も明言はしていないが、疊韻の語のとらえ方はこれと同じであると讀みとれる。しかし馬瑞辰もやはり毛傳の「幽閒」説を無批判に正しい解釋としてとらえている。この點に於いては陳奐も同じであり、近現代に入っても毛傳説に従う傾向はほとんど變わることはなかったようである。その他、複数の説を併記して自身の見解を明らかにしない説や、独自の解釋を述べる説があることがわかった。日本の研究者の立場は中國の諸家と同じであるが、複数の説を併記するものはほとんどない。しかし戦後の『詩經』研究者の中には、清朝考證學の成果を用い、或いは甲骨・金文の専門的な知識や宗教學・民族學・民俗學・社會學・歴史學等の補助的な知識を用いる研究者によって、毛傳や鄭箋等の傳統的解

釋にこだわらない多様な解釋がなされるようになった。現代では、中國に於いてもようやくこの方法が使用されつつある。

『詩經』の詩は人間が作り、詠ったものである。古の人々が何を考え、何の目的でこれらの詩を詠ったのかを理解しなければ、眞の意味で詩の原義を理解したことはない。その爲に『詩經』研究者が補助的に力を借りるべき學問の分野が、例えば甲骨・金文の知識や宗教學・民族學・民俗學・社會學・歴史學である。無論、『詩經』研究の分野には、『詩經』を經學としてとらえる立場からのアプローチの仕方もある。従って、『詩經』を解釋する場合は、自身の立脚點を明確にすることが必須となろう。中途半端な立脚點から『詩經』の詩を解釋すべきでないことは言うまでもない。

注

- (一) 『詩經』の成立年代については、家井眞『詩經』の原義的研究（研文出版 二〇〇四年）四八頁を参照されたい。
- (二) マルセル・グラナー著／内田智雄譯『中國古代の祭禮と歌謠』（平凡社・東洋文庫 一九八九年）。
- (三) ミルチャ・エリアーデ著／久米博譯『豐饒と再生』（エリアーデ著作集第二卷、せりか書房 一九七四年）、『聖なる空間と時間』（エリアーデ著作集第三卷、せりか書房 一九七四年）、ミルチャ・エリアーデ著／堀一郎譯『天地・農耕・女性』（未來社 一九六八年）等。
- (四) 柳田國男『定本柳田國男集』（筑摩書房 昭和四三年～四六年）。
- (五) 折口信夫『折口信夫全集』（中央公論社 昭和四〇年～四三年）。
- (六) 毛亨傳・鄭玄箋・陸德明音義・孔穎達疏・校勘記阮元撰『附釋音毛詩注疏』（重刊 宋本十三經注疏、藝文印書館 民國五四年）。
- (七) 鷗陽脩『詩本義』（臺灣商務印書館 一九六六年）。
- (八) 朱熹『詩集傳』（慶應元年江戸須原屋茂兵衛等重刊本）。
- (九) 陳奐『詩毛氏傳疏』（國學基本叢書、商務印書館 一九六八年）。
- (一〇) 馬瑞辰『毛詩傳箋通釋』（中華書局 一九八九年）。
- (一一) 王先謙『詩三家義集疏』（中華書局 一九八八年）。
- (一二) 王念孫『廣雅疏證』（中文大學出版社 一九七八年）、王念孫『讀書雜誌』（臺灣商務印書館 民國五七年）、王引之『經義述聞』（臺灣商務印書館 民國六六年）、王引之『經傳釋詞』（江蘇古籍出版社 一九八五年）。
- (一三) 陳啓源『毛詩稽古編』（皇清經解卷六〇）八九、復興書局 一九六一年）。
- (一四) 戴震『毛鄭詩考正』（皇清經解卷五五七～五六〇、復興書局 一九六一年）。

『詩經』を讀む爲に(一)——周南・關雎篇「窈窕」の意味について——(福本 郁子)

- (一五) 林義光『詩經通解』(中文出版社 一九七二年)。
(一六) 聞一多『詩經新義』『詩經通義』(『聞一多全集』全四冊(三聯書店 一九八二年) 卷二所收)、『風詩類鈔』甲乙(『聞一多全集』全四冊(三聯書店 一九八二年) 卷四所收)等。
(一七) 屈萬里『詩經詮釋』(聯經出版事業公司 民國七二年)。
(一八) 袁梅『詩經譯注』國風部分(齊魯書社出版 一九八〇年)。
(一九) 程俊英・蔣見元『詩經注析』(中華書局 一九九一年)。
(二〇) マルセル・グラナー、注(二) 前掲書。
(二一) マルセル・グラナー、注(二) 前掲書一五四頁。
(二二) 目加田誠『詩經』譯注篇(丁字屋書店 昭和二十四年)。
(二三) 境武男『詩經全釋』(汲古書院 一九八四年)。この書は著者が秋田大學で教鞭をとっていた際、教材として少數を自費出版していたものを、後任の石川三佐男が奔走し、改めて五〇〇部程を出版したものである。
(二四) 松本雅明『詩經諸篇の成立に關する研究』(東洋文庫 昭和三十三年)。
(二五) 松本雅明、注(二四) 前掲書六頁。
(二六) 共著として『詩經』中(新釋漢文大系一一一、明治書院 平成一〇年) 三三二―二九九頁があり、別に單著として、『詩經』(新書漢文大系、明治書院 平成一四年)、『詩經』(興詞研究)(研文出版 二〇一二年)がある。
(二七) 赤塚忠『詩經研究』(赤塚忠著作集第五卷、研文社 昭和六一年)。
(二八) 白川靜『詩經國風』(東洋文庫、平凡社 一九九〇年)、『詩經雅頌一』(東洋文庫、平凡社 一九九八年)、『詩經雅頌二』(東洋文庫、平凡社 一九九八年)等。
(二九) 家井眞、注(一) 前掲書。
(三〇) 「則幽閒處深宮貞專之善女」は、漢文大系一二『毛詩』(富山房 明治四四年)は、「則幽閒處深宮。貞專之善女」と句點をつけて讀むが『十三經注疏整理本四・毛詩正義』(北京大學出版社 二〇〇〇年)に従った。
(三一) 馬瑞辰、注(二〇) 前掲書。
(三二) 朱熹、注(八) 前掲書。
(三三) 馬瑞辰、注(二〇) 前掲書。
(三四) 陳奐、注(九) 前掲書。
(三五) 陳子展『國風選譯』(上海古籍出版社 一九八三年)。
(三六) 屈萬里、注(一七) 前掲書。
(三七) 高亨『詩經今注』(上海古籍出版社 一九八〇年)。
(三八) 程俊英、注(一九) 前掲書。
(三九) 林義光、注(一五) 前掲書。
(四〇) 袁梅、注(一八) 前掲書。
(四一) 吳委雲『吳氏遺著』(光緒一七年廣雅書局刊本)。
(四二) 「望文生義」とは、文字面だけを見て、都合のいい解釋をこじつけることである。古典中國語を解釋する場合、決してとるべきではない態度である。
- (四三) 俞樾『群經平議』(皇清經解續編卷一三六九―一三七二、藝文印書館 民國五四年)。
(四四) 朱駿聲『說文通訓定聲』(藝文印書館 民國八三年)。
(四五) 丁惟汾『詩毛氏傳解故』(詒雅堂叢書六種、中華叢書編審委員會 民國五五年)。
(四六) 丁惟汾、注(四五) 前掲書。
(四七) 陳奐、注(九) 前掲書。
(四八) 清原宣賢『毛詩抄』(岩波書店・岩波文庫 昭和十五年) 五〇頁。室町時代の天文三(一五三四)年、宣賢が五十九歳頃の成立と考えられる。
(四九) 中村惕齋『詩經示蒙句解』(漢籍國字解全書第五卷(早稻田大學出版部 大正六年) 所收) 一二頁。
(五〇) 清潭『國譯詩經』(國譯漢文大成第一〇卷(國民文庫刊行會 大正一〇年) 所收) 二頁。
(五一) 目加田誠、注(二二) 前掲書九頁。
(五二) 松本雅明、注(二四) 前掲書六六頁。
(五三) 松本雅明、注(二四) 前掲書六二―六三頁。
(五四) 松本は注に「たとへば松崎鶴雄氏『詩經國風篇の研究』一九三七年、五〇頁」と言う。注(二四) 前掲書一〇八頁。
(五五) 高田眞治『詩經』上(漢詩大系、集英社 一九六六年)、『詩經』下(漢詩大系、集英社 一九六八年)。この書は、戦後、日本に於いて『詩經』を初めて口語で翻譯されたものである。「漢詩大系」というシリーズの一であったこともあり、全國の高等學校や大學圖書館等に配架され、廣く讀まれることとなった。猶、「漢詩大系」は、後に「漢詩選」として一九九六年に再版された。
(五六) 高田眞治、注(五五) 前掲書上二七―二八頁。
(五七) 境武男、注(二三) 前掲書一四頁。
(五八) 赤塚忠、注(二七) 前掲書五六頁。
(五九) 陳奐、注(九) 前掲書。
(六〇) 白川靜、注(二八) 『詩經國風』五一頁。
(六一) 家井眞、注(一) 前掲書四一―四頁。猶、家井は「窈窕淑女」の日本語譯を「たおやけき巫女」としているが、語釋に従えばこれは「すらりとみめ麗しい巫女」の誤りであると考えられる。
(六二) 王念孫『讀書雜誌』(臺灣商務印書館 民國五七年)。